

楮から和紙をすき，手づくりの卒業証書にする活動

長野県下水内郡栄村立北信小学校

学校の概要

学校規模

学級数：6学級

児童数：85人

教職員数：15人

体験活動の観点からみた学校環境

栄村は，地理的には長野県の最北端で新潟県との境に位置し，日本でも有数の豪雪地である。村の面積の約93%が山林であり，人口は約2,800人で過疎と高齢化が進む地域である。

学校は，南側に千曲川（信濃川）が流れ，西にはぶなの天然林があるなど自然環境に恵まれたところにある。

児童は，通学区域が広いため徒歩，スクールバス，村営バス，JRなどを通学手段としている。

家庭は3世代家族が多く，最近では農業中心でなく共働きの家庭が増えている。自然豊かな環境にありながら児童は外で遊ぶことも少なく，都市型の傾向にある。

村では，東京都武蔵村山市，横浜栄区と姉妹都市提携を結んでおり，児童との交流を毎年行っている。

連絡先

〒389-2702

長野県下水内郡栄村北信1

電話：0269-87-2006

FAX：0269-87-2435

ホームページ：

<http://www.dia.janis.or.jp/hokusyo1/hokusinsyougakkou/index.htm>

電子メール：hokusyo1@dia.janis.or.jp

体験活動の概要

活動のねらい

伝統産業である和紙づくりの体験を通して，地域のよさに目を向ける。

地域の人々との交流を深める。

世界でたった一つの卒業証書を作り，ものを大切に作る心を育てる。

主な活動内容・方法（位置付け・期間等）

第6学年の児童全員

主な活動期間は，12月上旬から3月上旬までの冬期4ヶ月間

楮（こうぞ）の刈り取り（総合的な学習の時間1時間，学級活動1時間）

楮の皮むき（総合的な学習の時間8時間）

表皮取り（総合的な学習の時間2時間）

皮を煮る（総合的な学習の時間5時間）

和紙すき（総合的な学習の時間12時間）

（以上すべて地域の方の指導）

卒業証書の額づくり（総合的な学習の時間2時間，学級活動1時間）

（森林組合の協力・指導）

体制等の工夫

指導は校区に住む地域の方に依頼

必要な用具は地域や振興公社より借用

講師謝礼等は村の予算より支出

活動の成果等

伝統産業のよさとそれを守り続けている人々の知恵と技術を知ることができた。

指導者の方への連絡，作り方調べは児童中心に，責任を持ってできた。

学習してきたことが形（卒業証書）として残り，次への意欲につながった。

1 活動に関する学校の全体計画

(1) 活動のねらい

- ア 地の利を生かした村の伝統産業を体験することにより、先人の知恵のすばらしさに気づく。
- イ 自分たちの住んでいる村のよさ（文化）を知り、ふるさとを誇りに思う心を育てる。
- ウ 体験を通して自然の偉大さを学ぶ。
- エ 地域の方との交流を通して、思いやりの心を育む。
- オ 手作り和紙と桐の額で自分の卒業証書を作ることにより、ものの大切さを知ると同時に小学校時代のよい思い出とする。

(2) 全体の指導計画

ア 活動の名称

「楮から和紙をすき、手づくりの卒業証書を作ろう」

イ 実施学年

第6学年

ウ 活動内容

伝統産業にかかわる体験活動：和紙づくり、桐材の額づくり

先人の知恵を知る体験活動：楮を煮て皮むき、表皮取り、皮を煮る、雪さらし、皮を砕く

自立的・協力的な体験活動：楮の刈り取り、紙漉（す）き、指導者への連絡・挨拶

地域の方との交流する体験活動：和紙作り調べ等

エ 教育課程上の位置付け

- ・ 教育課程内の体験活動として位置付けており、12月上旬の楮の刈り取りから始まり、3月上旬の卒業証書の完成まで総合的な学習とする。
- ・ 活動内容の位置付けは、総合的な学習の時間、特別活動の学級活動としている。

オ 実施期日（日数や時間数）

12月上旬から3月上旬にかけて約9日間

時間数は、総合的な学習の時間30時間、学級活動2時間

カ 活動場所

学校の1階ピロティーや図工室を中心として活動するほか、地域の方の畑において楮の刈り取りを実施している。

キ 継続の状況等

飯水地域（飯山市下水内郡）の伝統産業についての事前学習において、この地域の人々が雪を生かして和紙作りに取り組んでいる様子を調べた。

子どもたちは、地域の指導者の方々との関わりの中で、その知恵と技術を実際に体験した。手間がかかり、寒さの中での作業であっても、手作り和紙の卒業証書を目標に、最後まで全員がやり通すことができた。

手作り和紙の卒業証書づくりが第6学年の総合的な学習として位置付けられ、毎年継続して行われるようになる。

2 活動の実際

(1) 事前指導

社会科で地域の伝統的な産業として内山和紙の学習をし、和紙の特徴や原材料について調べてきた。その中で実際に地域の方の楮の畑を見に行くなどして動機付けを図った。

(2) 活動の展開

ア 活動の場や施設

基本的に活動の場は、学校である。ただ、原料となる楮は指導者の方から譲っていただいているので、刈り取る作業は指導者の方の畑で行った。

イ 活動内容

(ア) 楮の刈り取り (12月上旬 2時間)

雪の降る前に楮を刈り取り、同じ長さ(60cmくらい)にそろえて束ねる。

(イ) 楮を煮る (12月下旬 6時間)

ドラム缶を使い楮を煮る。班ごとに交替で火の番をする。その後、煮た楮の皮をむく。

(ウ) 表皮をむく (1月中旬 2時間)

「おかき」という道具を使い、皮の表皮をむく。

(エ) 雪に皮をさらす (1月下旬 2時間)

太陽が出て天気のいい日、きれいな雪の上に表皮を取り除いた皮をさらす。

(オ) 再度皮を煮る (1月下旬 5時間)

雪にさらした皮を水につけて置き、再度皮を煮る。苛性ソーダとソーダ灰をいれた水で5時間ほど煮る。茶色い水(灰汁)が出て更に白さを増す。

(カ) 皮をたたき細かくする (2月上旬)

平らな石の上で皮を木づちでたたき繊維をほぐす。この作業は、道具がそろわないため、指導者の方の家でやってきていただいた。



〔みんな上手に切っているね〕

(キ) 紙を漉く (2月中旬 乾燥も含め12時間)

漉いた和紙を3枚重ねて一枚の証書にする。木枠をほぐした繊維とのりを混ぜた液の中に垂直に入れて持ち上げ、左右、前後に何回も揺すりながら繊維が均等になるようにしていく。漉いた和紙をプレス器で圧縮して水気を抜き、乾燥させる。

和紙を乾燥させる際、艶を出すために雪楮の葉で表面をこする。

(ク) 卒業証書額作り (3月上旬 3時間)

手漉き和紙の卒業証書が入る額はなかなか市販されていない。そこで額も手作りにしようと考えた。額の材料の木は、村木である桐を使って作ることにした。森林組合の協力により額の枠を作ってもらい、それを児童がボンドで組み立て、思い思いの絵や柄を描いた。

ウ 指導者・協力者

今回の活動の指導には、地元で紙漉きを行っている方をお願いした。また、額の製作については栄村森林組合の方に相談に乗っていただき、材料の調達、加工までお願いした。

エ 児童の活動の状況

【伝統産業にかかわる体験活動】

一人一人が2枚から3枚の和紙を自分自身で漉く体験、村の木である「桐」を使用した額作りの体験により、自分の住んでいる村の産業や自然のよさを再発見できた。

【先人の知恵を知る体験活動】

楮の皮むきの際に、枝の細い方を上にしてむくとうまくむけないが、枝の太い方を上にしてむくと簡単にむけるということを実際の作業を通して体験した。雪さらしでは、天気の良い日に楮の皮の上に雪をうすくかけ、雪が解ける際に漂白作用があることを体験した。児童は豪雪地域ならではの 방법으로、雪を上手に利用していることに驚いていた。また、乾燥させるときに雪楮の葉でこすると艶が出ることを、様々なものを試す中で発見したことを聞いた。更に、この雪楮は栄村が生息の境界線にあることもここで知ることができた。

【自立的・協力的な体験活動】

細くしなりやすい楮を切る作業は意外と難しい。そこで児童は、隣にいる児童に枝を持ってもらい切っていた。知らず知らずに協力し合う姿が生まれた。「さん、ありがとう。」などという声も聞こえてきた。紙漉きの際にも、周りで見ている児童が、「もっと垂直に。」や「うまい、うまい。」「ゆっくりゆらすといいよ。」など、アドバイスをし合う場面もあった。また、紙漉きの係を決め、指導者の方との日程や作業内容の連絡は児童が行った。その結果、自分たちがやらなければという意識が生まれ、担任が声をかけなくても自分たちから進んで連絡を取るようになった。この他にも、連絡を取る際の電話での受け答え、作業を始める前の挨拶が活動を進めていく中で上手になっていった。

【地域の方との交流する体験活動】

指導者が地元の方ということもあって、児童はすぐに打ち解けた。作業の中で分からないことを、自分から聞きに行ったり手伝ってもらったりしていた。地域の方のやさしさに触れていた。卒業式当日は、かつて指導者の方が見本に漉いて見せてくれた和紙に、児童が感謝の気持ちを寄せ書きにして渡した。児童と指導者の互いの心が通じ合う場面であった。



(3) 事後の指導

〔ゆっくり、ゆすろうね〕

自分たちが今回活動をしてきたことを他学年にも伝えようと、自分たちの活動の様子が分かる写真や作文を使い、全校集会の時間に発表をした。

内山和紙の他にも自分たちが住んでいる村にどんな伝統産業があるか、あらためて見つめ直してみた。(桐下駄、ねこつぐら、つる細工、そば、あんぼ[米の粉で作った饅頭]など)

また、学級会を開き、お世話になった指導者の方へどのように自分たちの感謝の気持ちを伝えるか、子どもたち自身が考えた。

3 体験活動のための体制

- ・ 和紙漉きの用具は、村の振興公社よりお借りすることができた。
- ・ 指導者への謝礼は、村の予算から支出した。

4 成果と課題

- ・ 和紙作りの活動を通して、雪を使つての漂白や雪楮での艶だしなどを学び、この地の利を生かした先人の知恵や技術、また、それを守ろうとする地域の方々の姿に実際に触れることによって栄村のよさを再発見できた。
- ・ 今回は指導者の方との連絡(作業日程、作業内容など)を児童自身が全て行った。そのことにより、自分たちがやらなければという気持ちになり意欲が持続した。

- ・ この活動で一番感じたことは、感想に「次の作業もがんばりたい」とか、「次の作業も楽しみだ」という児童の声が多かったことである。こうしたことから、紙を漉くことの楽しさ、自分でがんばったことが形としてできあがる喜びを感じていたのだと思う。また、その証拠として、ほとんどの児童が余った楮ではがきを作っていた。
- ・ 児童は、指導者の方(地域の方)と関わる中で、例え手間がかかっても手作りという本物にこだわる姿に心を寄せていた。卒業式当日、指導者の方に感謝の気持ちを込めて贈った寄せ書きの中で、「将来、和紙作りをやってみたい」という児童もいた。
- ・ このような活動は、栄村のような少人数の学校だからこそできることかも知れないが、自分の住んでいる土地のよさや素晴らしさに少しでも目を向け、自信を持たせることができる活動を取り入れることが、ここに住む子どもたちの生きる力となっていくと思う。



〔やさしく教えてくれました〕

児童の感想

今日、3、4時間目に地域の方のところへ行って、こうぞの刈り取りをしました。のこぎりでこうぞを刈り取る時に、すごく固くて切れにくいのかなあと思いました。でも、すぐに切れました。切ったときは、「すごい、切れた。」と思いました。こうぞを切って思ったことは、桐の木みたいに中心に穴があいていたことです。木の種類で似たのがあるなと思いました。

今日は、こうぞを煮ました。だんだん燃やしていくうちに、けむりがすごくて息苦しくなりました。和紙作りはただすくだけかと思っていたけど、こんなに手間がかかるとは思いませんでした。最後に、地域の方が勉強になるお話をたくさんしてくれました。

和紙をすきました。はじめは失敗すると思っていたけど、やってみるとちょっと簡単でした。でも直角に入れてすくう時が大変でした。紙をかわかす時がけっこうおもしろかったです。紙をはぐ時はするすとはげていきました。紙を見たら、キラキラに光っていたし、すべすべでした。やっぱり、ふつうの紙とは全然ちがうと思いました。

今日、2時間目に和紙すきの作業をしました。待ちに待った紙すきで自分が紙すきをする時はワクワクしました。他の人がやっている時は簡単そうだなと思ったけど、実際はすごく難しく、腰がとて痛かったです。紙すきをした時に、直角に入れてからすくい上げる時に水が重くてあまり持ち上がりませんでした。でも、すくい上げ終わった時は軽くなって楽しくできました。一番難しかったのは、すいた和紙を重ねる時に空気が入ったりして大変でした。でもいい経験ができてよかったです。

今日も、昨日と同じように紙すきと乾かす作業をしました。ぼくは昨日1枚乾かしてあったので、今日は2枚目の紙をすくうことにしました。昨日1回やってあったので少しだけ楽しめた。でも紙をすくった時重くてちょっとつかれたし、手もすごく冷たくなってしまいました。こんな作業を続けている地域の方はすごいなあと思いました。

卒業式に自分たちで作った思い出がたくさんある卒業証書を渡され、とてもうれしかったです。紙すきで作る楽しさと難しさを体験しました。これは自分の一生の宝物です。

5 今後の取組の方向

本校では、この活動を3年間継続しているが、今後も本校の6年生の総合的な学習として位置付け、行っていくこととしている。

この活動は、事前学習、事後学習ともに発展する可能性が高い活動である。よって総合的な学習のカリキュラムをしっかりと組み立て、更に学習としての質を高めていきたい。

また、指導者の方から楮の若木を譲っていたが、学校園に植えた。そこで今後は、この若木
〔世界で1枚、自分だけの卒業証書〕
が根付き、原料を自分たちで栽培及び世話をするところから活動を始めようと、取り組んでいる。



【本事例活用に当たっての留意点】

6年生が、楮(こうぞ)から和紙をすき、自分自身の手作りの卒業証書を作る活動は、今後も6年生の「総合的な学習」として位置づけられ、継続されていくことになっている。

この活動の大きなねらいは、地域の伝統産業である和紙づくりの体験学習や、紙すきや桐材の額づくりを指導してもらった地域の人々との交流を通して、自分の住む地域に対する理解を深めること、更に、自分の手ですいた和紙を使って自分の卒業証書を作ることによって、物を大切にする心をはぐくむことである。

本事例においては、地域の指導者と、作業日程や作業内容などの連絡を、6年生の児童が全て自分たち自身で行うことにより、児童の自立心や活動に対する意欲を高めることができるよう工夫している。

なお、児童生徒の自主的な活動を重んじる体験活動を実施する際には、教員や指導者等との適切な役割分担及び指導の在り方等について十分配慮する必要がある。